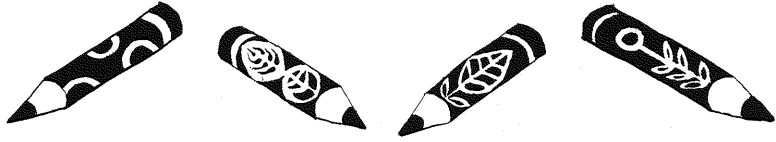


巻頭言

「ままごと遊び」から考えたこと

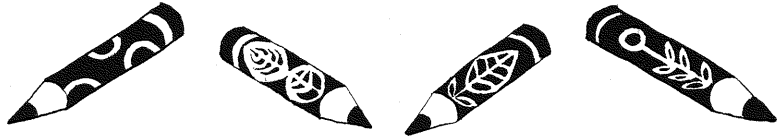
秋田 喜代美

ごっこ遊び、中でもままごと遊びは、どこの園でも環境として準備されているものの一つといえるだろう。「みたてが生じる物」と「状況設定」、「出来事のプラン」、「ごっこの役割」によって、この遊びは発生する。一園で一年間ごっこ遊びコーナーで遊ぶ子どもたちが相互にどのようなようにしてごっこの役をとっていくのかについて、集団内での変化を縦断的に追って観察研究（増田・秋田二〇〇二、秋田・増田二〇〇二）をしたことがある。とりたい役を主張できる子もいる一方で、仲間の中での力関係が固定し役が主張できない子どもの発達と関係性の変化をとりあげた研究であった。先日そのビデオを一緒に見たり論文を読んで、保育者の先生方と話し合う機会を得た。そこで先生方と話し



合った中で私の心に残ったことを、本稿でも考えてみたい。

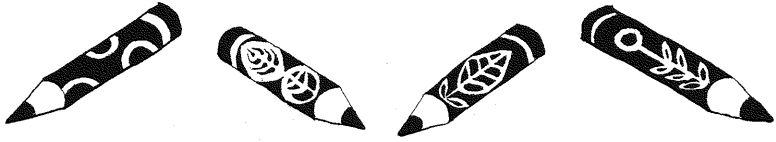
一点は、近年の傾向として、ペットになりたがる子どもが増えていて、おかあさん役になりたがる子どもが少なくなってきている、ましてお父さん役においては遊びの中に登場してきたとしても、会社に出かける人や食事をする人としてしか演じられないという、ままごとの役をめぐる変化である。この変化は実は他の研究会でも指摘された話題であり、特定の園だけの傾向ではなくようになってきているようである。ペットというのはケアされかわいがられる存在であるが、遊びの中での役としては叱える、甘える、動くなどあまり活動性や新たな発想ができてにくい役回りである。それを喜んでやってみようとする子どもたちはどのような心理をもっているのだろうか。思いっきり甘えてみたい心理や友人関係の中でも楽な遊びをしたいという思いだろうか。あるいはどこかでペットになりたい願望だろうか。実は子どもはとても楽しんでペット役やふるまいをやっていたりする。しかしわが子が紐でつながれたりして連れられるペットをしているのを親が見ると、心安らかではいられず、連れる者と連れられる者の関係に目がいき子どもが遊んでいるというのを忘れてしまう親も時にいる。ある先生は、「ペットにつける飾りを工夫したり、紐はやめようねと言ったりはしますけど」と言われた。また多くの保育者の方は、このような時に「他の遊びや役もやっているのですよ。だから大丈夫ですよ」と親に説明すると言われた。各園でこのような場面をどのようにみるか、どのように親に語るかを話しあってみることも子どもの心を探る一つのきっかけになるだろう。



母親が子どもたちにとって魅力的に映っていないことや子どもから見える父親像の貧困さを表しているようにも思える。家庭生活のおもしろさが子どもに見えにくいことが遊びの広がりや狭めているのかもしれない。

この点とも関連して、二点目に、園でのごっこコーナーの環境としての物の出し方や場の設定が議論された。園によって比較的長期的に同じ場所にコーナーが作られている園もあれば、オープンなスペースで特定の場所がない園もある。もちろん学年や一年間の中でもどの時期であるかによっても環境設定は異なっている。この園では同じ場所と比較的同じような物での遊びが継続していた。それが友人関係の固定化を招いていないか、変化を生み出すものがあると遊びの質が変わったのではないかという視点であった。そのビデオの園の先生は力のある先生で、日頃から保育環境もよく工夫されている先生である。先生にとつての主活動ではいろいろな工夫をされているのである。しかしむしろ日常化しているコーナーは、子どもが安定してしばらく遊ぶ場としてあまり重視はされていないように見えた。子どもも遊んでいるから安心しておられるのである。そしてその先生なりには様々な食べ物の素材が粘土から毛糸に変わったたり鍋も加わったりと変えているのである。でも子どもと他者との関係、他の遊び集団との動線等基本的活動はあまり変わっていない。

子どもと他者との役割や出会い、関係性、活動の展開を変えていく環境設定と、目先の素材は変わるが活動や関係はあまり変わらない環境設定がある。たとえば牛乳パック



での電車作りがお菓子箱の電車作りになってもその素材は遊びの中での物との関係、人との関係をあまり変えないことが多い。しかし列車を相互につなぐガムテープや線路になるテープやダンボールは子どもたちの遊びの関係を变えていく。砂場のバケツやスコップの材質が変わると新奇性は増すが砂や水との関係はあまり変わらない。しかしそこに桶や棒がでてくると活動の環境は変わってくる。出来事のエピソードが複雑にからんで発展してくるのである。毎日生ける花が変わっているので環境としては変わっている。しかし花に注意しない子には変化はない。しかしそこに関係する絵本がおかれたり、その花の成長の写真がおかれ目にとまることで、子どもと花との関係は変わる。メインの活動の環境と同時に、日常的な環境の中で、物や場と子どもとの関係を遊びの展開と共にどのように変えているかをみていく視座は、日常の環境を大事にする保育において大切なことではないだろうか。

(東京大学)

引用文献

増田時枝・秋田喜代美『遊びの開始時の「役」発生・成立スタイルの検討』保育学研究40(1)、七五―八二、二〇〇二

秋田喜代美・増田時枝『ごっこコーナーにおける「役」の生成・成立の発達過程』東京大学大学院教育学研究科紀要41、三四九―三六四、二〇〇二